

# 古典和歌における「鐘」の意象（その一）

## ——暁の鐘と入相の鐘——

劉 小 俊

### 一 はじめに

本来、仏教法具として仏教とともに日本に渡来して来た鐘が、その神秘的な音色と長い余韻で、多くの歌人の心を捉え、鐘を詠み込んだ歌が古くから数多く詠み出された。『新編国歌大観』全十巻の所収歌のうち、鐘を詠み込んだ歌は実に一〇一〇首以上に達する。その最も早い用例は次の一首である。

みなひとをねよとのかねはうつなれどきみをしおもへばいね  
かてぬかも

（『万葉集』巻四・六一〇）

作者不明のこの歌は、恋人のことを思うあまり、寝よとの合図でもあるかのような夜遅い鐘の音を聞いても、一向に眠れそうにない人の辛い気持ちを歌っている。しかし、そこには人の生死にも関わるほどの深い意味での悲しみや哀れなどは感じ取れないように思う。『万葉集』以後、『古今集』と『後撰集』には鐘を詠み込んだ歌は見当たらないが、『拾遺集』には次のような一首が当たる。

題しらず  
よみ人しらず  
山寺の入あひのかねのこゑごとにけふもくれぬときくぞかな  
しき

（『拾遺集』哀傷・一三二九）

これは勅撰集に採録された鐘の歌としては最初の用例であるが、右の『万葉集』六一〇番歌とはやや趣を異にしているように思われる。この歌は入相の鐘の音によって、日々がどんどん過ぎていくことを実感する作者の心情を詠んでおり、万葉歌にはない一種の哀愁を漂わせている。その哀愁とはつまり、流れて去って行く時を止めることもできず、ただひたすらその流れに身を任せるしかない虚しさで悲しさである。

『拾遺集』一三二九番の歌にも見られるように、平安朝以後の鐘を詠み込んだ歌には、「悲し」をはじめ「哀れ」「嘆く」「寂し」等の言葉が多く使われ、全体として悲哀感や感傷的な感情が色濃くなっている。それは時代の移り変わりによって、「仏教が智識人層に浸透普及して、共通の文化基盤となった」こと<sup>1)</sup>、それに時

勢への不安も加わって、仏教の無常観が鐘を詠み込んだ歌にも反映し、「悲哀、感嘆、感傷」といった、所謂「無常感」<sup>(2)</sup>がその歌の一つの主題となったためではないかと思われる。また、鐘を詠み込んだ歌が平安後期、特に鎌倉期以後の歌集に多く見られるのも同じ理由によるのではなからうか。

鐘を詠み込んだ歌のもう一つの主題は、前掲の万葉歌がそうであったように「恋」である。鐘の音は恋人に逢えない夜の辛さや、曉の別れの悲しみを一層つのらせる。恋人を待つ宵の鐘の寂しい響きと、別れを促す曉の鐘の音への恨めしさが、多くの歌に詠まれている。

しかし、本稿ではこのような主題論はさておき、中国古典詩歌の研究においてよく使われる「意象」という概念を借りて、日本の古典和歌における鐘の持つ意味を検証してみたいと思う。

## 二 意象について

「意象」とは、もともと中国古代の文芸理論上の概念であり、六世紀の梁の劉勰『文心彫龍・神思』に既に「意象」という言葉が使われている。

使玄解之宰、尋声律而定墨。独照之匠、窥意象而运斤。

(すばらしい名手が声律を考えて文章を作り、独創的な名工が「意象」によって斧を運ぶ。)<sup>(3)</sup>

さらに、劉勰は「意象」こそ創作の基本であり、構想の発端であ

るとした。その後も、各時代にわたって「意象」はさまざまに論じられてきた。北京大学の袁行沛氏は長年の研究に基づき、「意象」について次のような定義を下している。<sup>(4)</sup>

意象とは主観が融け込んだ客観的な物象と言える。あるいは、客観的な物象を借りて表された主観的な情意と呼んでもよい。本稿で検証する「鐘」を例にとりて説明してみれば、「鐘」という語は客観的な事物を表し、それは「象」である。しかし、歌人が「みずからの人格や情趣や美学を融けこませると、それは詩歌の「意象」に変わる」。<sup>(5)</sup> 杜甫の「遊龍門奉先寺」に有名な次の詩句がある。

欲覺聞晨鐘 令人寤深省

この詩だけではなく、古くから繰り返し描かれてきたため、中国古典詩における「鐘」の意象には「警鐘」の意味合いが含まれている。<sup>(6)</sup>

さて、新日本古典文学大系『万葉集一』(岩波書店)は、前掲の六一〇番歌の脚注の中で「時を知らせる鐘」について次のように述べている。

鐘で時を知らせるのは寺院の鐘で、一日を六時に分けるが、昼を晨朝・日中・日没、夜を初夜・中夜・後夜に分ける。

仏教法具として寺の鐘楼に吊るされ、定時的に鳴らされる鐘の悠長な音色が、塀を越えて空に響く。その響きによって、本来見えない、捉えられない、静かに流れていく時間が、聴覚で感じ取

れるものになり、人々はその音色に動かされて、いろいろな思いを馳せるのである。しかし、同じ景色が季節によっていろいろな表情を見せるように、同じ鐘の音でも朝、昼、夕、夜によって、人々に与える印象と、そのもたらす感情も違ってくることは、容易に理解できよう。本稿は、鎌倉期までに成立した歌集のうち、鐘を詠み込んだ和歌を収録している四三の歌集から延べ二六一首を検証し、「曉の鐘」と「入相の鐘」の意象、言いかえれば、当時の歌人たちがどのような感情でそれぞれの鐘の音を捉え、それらをどのように表現したかについて、一定の傾向性を見出したいと思う。

二六一首の内訳は、まず『続後拾遺集』までの十六代集に六〇首（ただし『古今集』と『後撰集』には用例がない）、六家集（『長秋詠藻』『秋篠月清集』『拾玉集』『山家集』『拾遺愚草』『壬二集』）に合わせて七三首が存する。そのほかの歌集について用例数の多い順に示すと、『夫木抄』六五首、『後鳥羽院御集』一三首、『隆信集』『西行家集』各六首、『拾遺愚草員外』五首、『和泉式部集』『教長集』各四首、『後葉集』『新六帖』各三首、『万代集』『和泉式部統集』『散木奇歌集』『基俊集』『統詞華集』各二首、『万葉集』『玄玉集』『赤染衛門集』『元輔集』『能因集』『頼政集』『清輔集』『寂蓮集』『建礼門院右京大夫集』各一首である。また勅撰集の六〇首について、部立別の歌数を示せば、春部二首、秋部七首、冬部三首、哀傷部五首、羈旅部二首、恋部七首、雑部三〇首、釈

教部三首となる。

なお、この二六一首のうち、曉の鐘ないし入相の鐘を詠んだ歌は合わせて一八二首であるが、その中に含まれる恋歌二一首については、恋歌の性格から別論にすべきと考えており、本稿においては対象外とした。

### 三 入相の鐘

時間の順に逆らうようだが、まずは入相の鐘の方から考察してみたいと思う。鐘を詠み込んだ歌二六一首中、入相の鐘の歌は延べ六八首を数えるが、そのうち二首の恋歌を除けば六六首になる。無論例外はあるが、この六六首の歌全体の基調となっているのは感傷であり、悲しみと憂愁である。単に言葉づかいを見ても、歌の中に「悲し」「哀れ」「寂し」「心細し」などが多く使われており、一つの特徴となっている。そのうち「悲し」を詠み込んだ歌が九首で一番多い。

さて論を進めるにあたり、まず「例外」と言つてよい次の二首について説明をしておきたい。

旅のみにてよめる

前大僧正道昭

ゆきくれて宿とふ山の遠かたにしろべうれしきいりあひの鐘

（『玉葉集』旅歌・一二〇一）

古寺花

参議為相卿

粟づ野や遠き霞に声もりて花の香つたふ入会の鐘

〔夫木抄〕春部四・一三三二

まず道昭の歌では、入相の鐘は道しるべとなつて、旅の道中にいる作者に安堵感を与えてくれる「嬉しい」音であつた。『夫木抄』の歌は夕暮の鐘の音が花の香りを遠い霞の向こうに運ぶという奇抜な想像で、霞、花の香と鐘の音を歌の中に融け込ませ、長閑な春の夕暮の景色を描き出している。この歌の中での入相の鐘の音は「長閑な」ものである。しかし、このようないわば感傷的な色合いをあまり感じさせない歌は、六六首の全体から見ると、極めて少なく、「例外」と言わざるを得ないのである。従つて、入相の鐘を詠み込んだ歌を分析し、入相の鐘に融け込んでいる意象を見出そうとする時、これらの歌は考察の対象外としたい。つまり入相の鐘を詠み込んだ歌の大多数を占め、その「主流」を成していると言える歌について述べてみたいと思う。

さて、入相の鐘を詠み入れたこれらの歌を検討してみてもまず気付いたのは、これらの歌が二つの歌群に分けられることである。

一つは「感傷」と名付けられる一群である。これらの歌に詠まれているのは夕暮に身を置き、暮れ行く空に響く鐘の音に誘われて、思わず哀れや悲しみ、そして身に沁みるような寂しさを感じる心情である。その例として次の四首を挙げておきたい。

秋

鐘のおとにけふもくれぬとながめ露ちる袖の秋かせ

〔後鳥羽院御集〕一二二六

題しらず

よみ人しらず

山寺の入あひのかねのこゑごとくにけふもくれぬと聞くぞかなしき

物名、をとこ、をんな、無常の心に

〔拾遺集〕哀傷・一三三九

いりあひのかねのおとこそかなしけれけふをむなくくれぬとおもへば

〔隆信集〕四三三

仏寺五首

なみにたぐふかねのおとこそあはれなれうべさびしきしきのやまでら

〔秋篠月清集〕一九〇

『後鳥羽院御集』一二二六番の歌が表しているのは、日が沈み、周りが次第に夕闇に包まれる中で、聞こえてくる鐘の音によつて、今日も一日が過ぎたことを知らされ、思わず悲しみの涙が零れる、といった作者の心情である。この歌と同じように、「拾遺集」と『隆信集』の歌の作者も、夕暮に鳴る鐘の音に時が流れていくことを実感させられ、心の底から湧いてくる空しさとやるせなさを覚えている。最後の『秋篠月清集』（藤原良経）の歌には、以上の三首に読み取れるような深い悲しみはないものの、入相の鐘の哀れな音色によつて夕暮時の山寺の寂しさが印象づけられ、感傷的な雰囲気を与えている。

もう一つは、生死に関する「思考」と、明日はどうなるかも分からないわが身に対する「不安」を歌った一群である。その例として次の四首を挙げておく。

入相の鐘のこゑを聞きてよめる

夕暮は物ぞ悲しき鐘のをとをあすも聞くべき身とし知らねば

〔和泉式部集〕三五五

此日已過 命即衰滅

寂然法師

けふすぎぬいのちもしかとおどろかす入逢の鐘のこゑぞかな  
しき

〔新古今集〕釈教歌・一九五五

題不知

慶政上人

いたづらのけふもくれぬと入あひに又めぐりあふわがなみだ  
かな

〔夫木抄〕雑部十三・一五二五五

山寺にていりあひのかねをききて

藤原基俊

いりあひのとはやまでらのかねのこゑあなころほそきわが  
身いくよぞ

〔万代集〕釈教歌・一七三七

まず『和泉式部集』の一首は、『詞花集』や『後葉集』にも収められおり、この一群を代表する歌と言ってよい。作者の和泉式部は、人が夕暮時を悲しいと思うのは、入相の鐘の音を明日も聞くことができるかどうか分からないからだと言っている。この歌

において入相の鐘の音が促しているのは、単に作者の感傷ではなく、明日は生きているかどうか分からないという我が将来と生死に対する強い不安であり、より深い意味での悲しみと無常感である。次の寂然法師の歌は、『出曜経』の「この日已に過ぎぬれば命則ち減少して小水の魚の如し。ここに何の楽しみあらん」によつたものと言われているが、筆者の理解では、人生と生死について真剣に思考した末の感歎であり、「此日已過、命即衰滅」すなわち人の命が日を追って衰滅していくことを悟った後の嘆きである。『夫木抄』の慶政上人の歌に詠まれているのも、和泉式部の歌と同様、生死の無常と将来に対する不安である。また、同じような「不安」感は、最後に掲げた藤原基俊の歌からも読み取ることができるであろう。この四首において注目されるのは、作者の「思考」のきつかけになったのも、また「不安」の気持を呼び起こしたのも、夕暮の空に響く鐘の音だということである。

まとめて言うと、上記の二群の歌の間に多少の違いはあるものの、これらの歌に詠み込まれた作者の心情は根本のところでは一致している。それは、つまり前にも触れたように、これらの歌の基調となっているのは感傷であり、物悲しさと憂愁である。上野英二氏は、仏教の無常観は「和歌には無常感という形でしか受け入れられなかった」とした上で、「悲哀、慨嘆、感傷」はすなわち「無常感」であると述べている<sup>(8)</sup>。となると、入相の鐘の意象には主に無常感が含まれていると言えよう。

では、なぜ多くの歌人が入相の鐘の音に嘆き悲しみ、多くの感傷的な歌を作り出したのか。また入相の鐘の意象になぜ無常感が滲み込んでいるのか。それは日（太陽）の象徴性と夕暮という特定の時間とに関わると思われる。太陽を光明と生命の象徴として見るのは恐らく世界の諸民族に共通する古くからの考え方であるに違いない。太陽が東から昇り西に沈むのは、一つの生命が誕生してから衰えるまでの過程を象徴しているかのようなのである。日の出を旺盛な生命力の象徴と見るなら、夕暮が人々に与える印象は生命の衰弱であり、死が近付くことへの恐怖だと言えよう。粟田勇氏は「西行をめぐって」と題する論文の中で、『新古今集』巻四秋歌上に並べて収録された、寂蓮法師・西行法師・藤原定家の所謂「三夕の歌」について次のように述べている。<sup>9)</sup>

「秋の夕暮れ」について考えると、もともと秋というものは時々刻々この世の動植物などの生命が失われてゆく、しかも、夕暮れともなると陽の光が次第に弱まり消えて、一切の物事が闇のなかに溶けてゆく。いわば二重の否定と喪失という様相をあらわにしているわけである。

秋と同じように、夕暮も一種の「否定」と「喪失」という様相をあらわにしている。このような「否定」と「喪失」の様相を示す夕暮の空に響く鐘の音が、人々の感傷と悲しみを誘い、人生と生死を嘆き悲しむのも自然の成り行きと言えよう。また、入相の鐘を詠み込んだ歌に秋の歌が多く見られるのも、所謂「二重の否

定と喪失」にその原因を求めることができるのではあるまいか。

#### 四 暁の鐘

暁の鐘、厳密に言えば明け方に鳴る鐘の音を詠み込んだ歌は全部で八四首であるが、そのうち恋歌九首を、本稿では検討対象外とした。

暁

あかつきとつげの枕をそばたてて聞くもかなしき鐘の音かな

（『長秋詠藻』一八二）

『新古今集』雑歌下にも収められている藤原俊成のこの歌は、白居易の有名な「遺愛寺鐘歇枕聴」の詩句をふまえながらも、原典となる詩の趣と違って、身の上を嘆き明かした哀切な心情を詠んでおり、入相の鐘を詠み込んだ歌と相い通じるところがある。和歌文学大系『長秋詠藻・俊忠集』（明治書院）は、この歌について「平安後期に至って、朝夕の鐘の音は歌人たちに憂愁の気分を促した」と述べている。しかし、この歌を全八四首中の一首として読むならば、その「例外」性に気付くのである。そして「朝夕の鐘の音は歌人たちに憂愁の気分を促した」という説明も、「夕」に関して言えば、すでに前節で述べたように確かにそのように言えるけれども、「朝」となると、そうとも言えないのではなかろうか。ここでも前節と同様、主流になる大多数の歌の分析を通して、暁の鐘の意象を探ってみたいと思う。



恋歌を別とすれば、暁の鐘を詠み込んだ七五首の歌には、入聲

の鐘の歌のように「悲し」「哀れ」「寂し」「心細し」などの言葉はあまり使われていない。その代わりに、暁の鐘と共に「月」「霜」「霧」などの自然現象を詠み入れた歌は三六首にも及ぶ。そのうち一番多いのは一〇首に詠み込まれている「月」で、次いで「霜」の五首が目立ち、以下「曙」「霧」「霞」「露」「嵐」「雲」「雪」「時雨」などが、暁の鐘とともに歌われている。これは暁の鐘を詠み込んだ歌群の注目すべき特徴の一つと言わねばならない。

堀河院御時、百首歌にてまつりけるときよめる

前中納言匡房

たかさこのをのへのかねのをとすなり暁かけて霜やおくらん

（『千載集』冬歌・三九八）

題しらず

法皇御製

嵐山ふもとの鐘は声さえて有明の月ぞ嶺にかかれる

（『続千載集』冬歌・六二二）

遠山曉霧

ほのかなる鐘のひびきに霧こめてそなたの山はあけぬともみ  
ず

（『拾遺愚草』二八三九）

百首御歌

順徳院御製

かねのおとしもとなり行く明けがたやよもぎが露もこほり  
そむらん

（『夫木抄』秋部六・六三四二）

正治二年三月左大臣家歌合 曉霞

はつせ山かたぶく月もほのほのと霞にもるる鐘のおとかな

（『拾遺愚草』二一五五）

右の五首は、それぞれ「月」「霜」「霧」「霞」「露」と共に暁の鐘を詠んだ歌であるが、これらの歌には感傷的な雰囲気代りに、明け方の風景を全身で楽しんでいるような趣がうかがわれる。『千載集』の大江匡房の歌は「豊嶺に九鐘有り、秋霜降れば則ち鐘鳴る」という「山海経」の故事をふまえながら、<sup>(10)</sup> 初冬の暁の凛烈な風景を歌い上げている。露は本来「夢さ」を象徴することが多いが、『夫木抄』の順徳院の歌では、「氷りそむらん」と表現されており、蓬の上に玉のように光る露によつて冬近い晩秋の早朝の景色と寒さが克明に描き出され、鐘の音もそのために清滑しさが備える。この二首において鐘の音は霜、露と互いに補い合つて、鮮明なイメージを作りだし、作者の詠もうとする朝の景色をより印象的に表出している。さらに『続千載集』の御製歌（後宇多院）は、嶺に掛かる月と鐘の音との組み合わせによつて明け方の空の清々しさと静寂を描き出し、『風雅集』巻一春上にも収められている『拾遺愚草』の後成歌では、霞の中から聞こえてくる鐘の音によつて、穏やかな朝の静けさが強調されている。

『千載集』には次のような歌も見られる。

題不知

円位法師

あかつきのあらしにたぐふかねのおとを心のそこにこたへてぞさく

〔千載集〕雑歌中・一一四九

この歌は暁の山風の音に入り混じって聞こえてくる鐘の音を、全身で心の奥底で受け止めた歌である。ここでは鐘の音が「宇宙の奥底から呼びかけてくる声」<sup>(1)</sup>として受けとめられ、宇宙と大自然に震撼される心を表しており、力強さが感じられる。また、暁の鐘が旧年を送り新春を迎えるしとして捉えられた例もある。

鶯

鐘のおとにこそこの日かずはつきはてて春あくる空に鶯のこゑ

〔後鳥羽院御集〕一〇六

早朝の空に囀る鶯の声は新春の朝の伸びやかさを描き出し、新春を迎えた慶びを伝えている。そして、この伸びやかさと慶びを運んできたのは鐘の音である。

以上述べてきたように、暁の鐘の意象は入相の鐘の場合とは大きく違っているように思われる。入相の鐘が無常感を表していたのに対し、暁の鐘は大自然の景色や現象を連想させ、その意象に早朝の清々しさと静けさが看取される。「否定」と「喪失」の様相を表す夕暮と違って、まもなく日が昇る明け方は、人々に光と希望を与えてくれる。夕暮が「否定」と「喪失」の様相を示すと

言うならば、明け方は「肯定」と「再生」の様相をあらわにしていると言えるのではなからうか。次の歌は、暁の鐘のこのような性格をよく表した一首と思われる。

かねのおとをききて

僧都源信

あかつきのかねのこゑこそうれしけれなきうきよのあけぬとおもへば

〔続古今集〕釈教歌・七五五

暁の鐘の音は長い夜が明けることを告げている。その鐘の音を殊更に嬉しいと歌ったのは、煩惱のために閉ざされていた無明長夜の闇が明れると思つたからである。そして、悟りに目覚めることができると思えたのは、外でもなく、「再生」を象徴する明け方に身を置いているからではなからうか。その一方、明け方の世界は静けさに包まれている。やがて日が昇り、一日の生活が始まると、世界は再び騒々しくなり、人々も変わらぬ日常の煩わしさに直面させられる。明け方は人々に静けさを味わわせ、心静かに自然を楽しむわずかな時間を与えてくれている。歌人たちは暁の鐘によってその「わずかな時間」を実感させられ、また暁の鐘と共に自分の感銘を歌に詠み込んだのである。

暁の鐘について論じる時、もう一つ無視できないことがある。それは「夢覚ます」といった意味合いを持つ七首の歌の存在である。

弘長元年四月四日楚忽百首

為家卿



月のこるさがののてらのかねのおとにつねにうき世の夢やさめなん

#### 述懐十首

〔夫木抄〕 雜部十六・一六四三二

山寺のあかつきがたのかねのおとにながねぶりをさましてかな

〔秋篠月清集〕 五九四

為家の歌は、暁の鐘の音を、うき世の夢から目が覚める、つまり悟りが開けてくる音として捉えている。次の良経の歌には「うき世」という言葉こそ使われていないが、「ながきねぶり」というのは「うき世の夢」と同じ意味を持つのではないかと理解される。紙数の都合で省略した他の五首も含め、これらの「夢覚ます」といった意味合いを持つ暁の鐘を詠み込んだ歌は、鐘の響きを悟りを聞く音として捉えている点において共通していると思われる。これらの歌は、数の上からは少数しか言えないけれども、もともと仏教法具として使われていた鐘の特性を考えると、これらは平安・鎌倉期の歌人たちの暁の鐘に対するもう一つの重要な捉え方をうかがわせる歌として注目されるのである。

## 五 終わりに

以上、中国古典詩歌の分析によく使われる「意象」という概念を用いて、平安・鎌倉期の鐘を詠み込んだ歌の中の、暁の鐘と入

相の鐘について考察してみた。意象の研究は中国或いは日本での漢詩研究において盛んに行われており、多くの成果を生み出している。さらに意象の研究を通して、「意象」どうしの組み合わせから中国の古典詩歌の芸術性の特徴を探る<sup>(12)</sup>ことができると思われる。和歌研究には「意象」という概念はあまり用いられていないようであるが、その概念を和歌の研究に借用し、和歌における意象の研究を通して、日本の和歌作者、すなわち歌人たちの持つ特有の感受性を見出し得るのではないかと思ひ、本稿の執筆に至った次第である。しかし、今回は暁の鐘と入相の鐘の意象を論じる試みに留め、中国古典詩などとの比較を含め、さらに踏み込んだ研究は今後の課題にしたいと思う。

#### 注

- (1) 岩波講座 日本文学と仏教 第四巻 第二章「西行をめぐる」  
岩波書店 一九九四年。
- (2) 岩波講座「日本文学と仏教」第九巻 第二章「和歌」(一九九五年)。
- (3) 袁行沛著『中国詩歌藝術研究』改訂版(北京大学出版社 一九九六年)。旧版の翻訳に佐竹保子訳「詩の芸術性とはなにか」(汲古書院 一九九三年)がある。
- (4) (5) 同右。
- (6) 傳道彬『晚唐鐘声』(東方出版社 一九九五年)。
- (7) 北村季吟『八代集抄』参照。

(8) 前掲(1)に同じ。

(9) 前掲(2)に同じ。

(10) 新日本古典文学大系『千載集』(岩波書店)。

(11) 前掲(9)に同じ。

(12) 前掲(3)に同じ。

△テキスト 歌の引用及び歌番号は『新編国歌大観』(角川書店)によつた。

△付記 本論文を作成する際、Eメールを通じて恩師工藤進忠郎先生のご指導を頂きました。深く感謝いたしますとともに、京都女子大学の愛甲弘志先生にも感謝の意を表したいと思います。

(りゅう しょうしゅん 京都女子大学非常勤講師)

#### 研究室受贈圖書雑誌目録V

国文白百合(白百合女子大学国語国文学会) 三三

国文目白(日本女子大学国語国文学会) 四十

国文論叢(神戸大学文学部国語国文学会) 三三、三二

古代研究(早稲田古代研究会) 三四

古代文学研究(古代文学研究会) 二一十

古典論叢(古典論叢会) 二七

語文(大阪大学国語国文学会) 七四、七五、七六

語文(日本大学国文学会) 一〇九、一一〇

語文研究(九州大学国語国文学会) 九一

語文と教育(鳴門教育大学国語教育学会) 十五

駒澤國文(駒沢大学文学部国文学研究会) 三八

相模國文(相模女子大学国文研究会) 二八

滋賀大國文(滋賀大國文会) 三九

実践國文學(実践國文学会) 五九、六〇

十文字國文(十文字学園女子短期大学国語国文学会) 七

樟陰女子短期大学紀要 文化研究(樟陰女子短期大学学会) 十

尚綱大学研究紀要(尚綱学園 尚綱大学) 二四

上智大学国文学科紀要(上智大学国文学会) 三四

上智大学国文学論集(上智大学国文学科) 十八

湘南短期大学紀要(湘南短期大学) 十二

抄物の研究(抄物研究会) 十一、十二、十三

女子大國文(京都女子大学国文学会) 二二八、一二九

女子大文学 国文篇(大阪女子大学日本語日本文学研究室) 五

二 叙説(奈良女子大学国語国文学会) 二八

書陵部紀要(宮内庁書陵部) 五二

新樹(梅光学院大学大学院文学研究科日本文学専攻) 十五

神女大國文(神戸女子大学国文学会) 十二

人文学会誌(宮城学院女子大学大学院) 二

人文学報(東京都立大学人文学部) 三三〇

親和國文(神戸親和女子大学国語国文学会) 三五